
夏の風

常盤夢人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の風

【Zコード】

Z2463F

【作者名】

常盤夢人

【あらすじ】

19歳、大学で経済を専攻する司はとりあえず大学に通っていた。
19の夏を彰^{あきら}、詩織^{しおり}、歩らとともに満喫しようとするのだが。。

空は澄みきついていて、雲は当たり前の様に白い。手をのばせば掴めるかもしない。

ふと誰かが自分を呼んだ気がした。しかし、勘違いだとすぐに気付いた。さつきから蝉の鳴き声に19の大事な夏がかき消されるのはと思う。

そう、俺は19歳の大学生で名前は青山司。^{つかさ}今、課題をそつちのけで夏休みを満喫する為の計画を練つている所だ。

「つかさあ～、友達が来てるよ。」

やはり勘違いではなかつた。母親が呼んでいたのだ。

一瞬、詩織^{しおり}が来たのかと思い、鏡で髪を整えたがそれはすぐにやる必要がない事だと分かつた。ドタバタと走つて2階にあがつてくる音が聞こえたからだ。この音は、彰^{あきら}だと思った。彰がドアを開けて入ってきた。彼は、齊藤彰。俺と同じ19で同じ大学の経済学科だ。彰とはたまたま入学式の時に席が隣で話したサッカーの話題で意気投合した。

まあ、大学と言つても2人はどうやって授業をサボつて単位を取るかについて真剣になつてゐる。彰は要領が良かつた。それは、司も認めていた。

例えば、2人で同じ様に時間割りを組んで同じ位サボつた。前期で司は8単位落としたのに、彰は一つも落とさなかつた。

「司、歩^{あゆみ}が言つてたぞ、単位を落とさない様に勉強しろって。」

「彰だつて同じ位しか勉強してないだろ。歩の言つなら後期は真面目に出席するかな。」

「馬鹿だな。歩はあゆみでも中嶋じゃなくてお前の母親の事だよ。」

そう俺の母親の名前は青山あゆみだ。彰は、してやつたりと笑つていた。

まじめつ（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

結局、何をしに彰は俺の家に来たのだろうか。しかし、いつも何の理由もなく彰は俺の家に来る。さつき話しかでた中嶋歩や幼なじみの長谷川詩織もだ。大学から俺の実家まで近いという理由から主に4人のたまり場になっている。

中嶋歩は18で大学1年で経済学部。俺と彰の誕生日が6月だから19であるが歩と詩織はまだ誕生日がきてないから18だ。

長谷川詩織は、文学部である。しかし、蝉の鳴き声は相変わらず衰えない。ぼーっとしている訳にもいかない。なぜなら、7月中に大学に行つて締め切りが過ぎたレポートを頭を下げて提出しに行かなければならないからだ。

「おい、まだこのレポート終わってないのかよ。歩に嫌われるぞ。」「つるさいつな。今から、やるんだよ。第一、このレポートとは関係ないだろ。」

そうは言つたものの、やはり詩織や彰に手伝つてもらつて終わらす事になりそうだ。なぜなら、今日はもう7月28日だからだ。

そういえば、

「司は、時間にルーズだしだしがない」って歩に言われたつけ。あの日の夜は、胸がナイフで刺されたみたいに痛かった。大学から家までの距離がこんなに暗くて遠いと思つた事はなかつた。

「おじやましまーす」

この声は詩織の声だ。

「おばさん、相変わらず綺麗ですね。」

「あら、やだね。暑いでしょう。飲み物でも持つてくれからね。司は部屋にいるよ。」

「ありがとうござります。」

遠くから会話が聞こえてくる。詩織は話し上手ですぐ人をその気に

させる。

詩織も部屋に入るなり俺のレポートから性格にいたるまで分析し、あんなに良いお母さんなのに、と嘆いた末に昼ご飯をおこねれば手伝わない事もないと言つてきた。

もちろん、俺はもちろんその要求を飲むしかなかつた。レポートを書いていたら詩織が

「そういえば、司と彰。夏休み8月2日は暇でしょ？」

「何で？」2人は、ほとんど同時に答えた。

「みんなで花火見に行こうと思つて。」

「バイトだからバス

俺の返答が気に入らないらしく

「歩も来るし、来なかつたら、歩にレポート終わつてない事言つか
ら。」

こう言われると行かざる終えない。

いつもこんな調子で、詩織のペースに乗せられている。彰は、いつもそれが楽しい様だ。歩が来るなら良いか。2人が帰つた後で、2人のおかげで完成したレポートをバックに大事にしまいながらふと思つた。

7月末（後書き）

感想などお待ちしています。読んだ方は、よろしくお願いします。

集合！

目覚めは最悪だった。「うるさいし、暑かった。何の音だらうと司は思つ。携帯のアラームを設定した覚えはなかつた。

とりあえず、枕もとにある陽気な音を奏でる携帯を手に取つた。

「司、今どこなの？」

詩織のよく聞き覚えのある声がした。司は、何の事だらうと思つたが、すぐに謎は解けた。今日は、8月2日。つまり、みんなで花火に行く日である。シマツタと思つると同時に田が完全に冴えわたつた。

詩織に言い訳してもすぐにはられる事は分かつていて。だから、素直に謝つて駅前まで急いだ。

詩織は、俺が寝坊するのが分かつたのだらうか待ち合わせの30分前に電話をくれたから何とか間に合つた。

どうせならもつとはやく起にしてくれと言おつとしたが、中学2年の時の約束に遅刻してビンタされたのを思い出すと言わない方が懸命だらうという事が、寝起きの頭でも即座に理解出来た。

待ち合わせ場所にはすでにみんな着いていた。

「セーフ」

2分前に駅の東口に着いた。

「遅いぞ」

彰が言った。

「司ちゃんらしくて良いんじやない。」

この声は久しぶりに聞いた。歩の声だ。海でも行つたのだろうか夏休み前より肌が小麦色に焼けていた。

「感謝してよね。あたしのおかげで遅刻しなかつたんだから。」

詩織が得意そうに言つた。

「ありがとう。じゃあ、行くか！」

「お前が言つなつて。」

すかさず、彰がつつこんでみんなに笑いがひろまつた。電車で1時
間半近く行つた所が花火大会の会場だ。昨年まで家の近くの湖が会
場だつた。今年から場所を変えて大々的にやるつて市の図書館の掲
示板にポスターが貼つてあつたのを思い出した。

何で花火を見に行くのに午前中に集まつたかといふと、詩織がみん
なで最近できた大型ショッピングモールに行こうと言い出したから
だ。新しいもの好きの詩織らしい提案だつた。

「何、ぼーっとしてんのよ。」

詩織に促されて駅の近くのショッピングモールへと3人を追いかけ
て入つて行つた。

夏の爽やかな風が司の背中を押した。やはり、空は晴れわたつてい
た。

ショッピングモールは、できたばかりのせいだらうか、それとも夏休みで日曜日だからだらうか人であふれていた。

「詩織、ちょっとこの服とこれどっちが良いと思う？」

彰は、こちらにワインクしながら詩織に尋ねている。

彰は、司が歩のこと好きなのは知っている。彰なりに気を使つてくれているのだろう。彰のはからいで詩織と彰と別れて歩と2人になつた。せつからく歩と2人になれたのに話す事はくだらない事ばかりだ。

歩は俺といて楽しいのかなと司は不安に思つた。

「ねえ、司聞いているの？」

歩の声で我にかえつた。

「ああ、聞いているよ。」

すかさず、返事をした。

「じゃあ、どっちなの？」

「えっ、何が？」

「やつぱり、聞いてないじゃない。」

「ゴメン、ほーっとしてた。」

司は、仕方なく認めた。

「いいよ。彰にどっちのワンピが似合つか聞いてくるから。」

そう言つて歩は彰と詩織を捜しに行つてしまつた。いつも、歩と話す時だけ仲間外れにしているのかもと思えてくる。だから、みんなを捜しに歩の行つてしまつた方に歩いた。

1人でいてもしょうがないと司は思つた。1人だけ人ごみに放り投げられた気分だ。みんなが誰かと話している気がした。人がみんな自分だけ仲間外れにしているのかもと思えてくる。だから、みんなを捜しに歩の行つてしまつた方に歩いた。

人で溢れかえつてゐる店内を捜すのは容易ではないと思つたが、意

外とすぐに3人を見つけられた。みんなで楽しそうに話しているのを見ると、彰を羨ましく思わざるおえなかつた。

嫉妬（後書き）

みなさんの感想、評価を受け付けています。よろしくお願いします。

あの頃

人ごみをぬう様にして4人で食事できそうな店を探した。どの店も家族連れやカップルで溢れていた。みんなで昼ご飯を食べたら、もうすぐ花火だ。

以前の花火大会には、中学の時まで毎年とは行かないまでもよく行つていた。初めて花火に行つたのは家族とである。友達ともよく行つたのを家族連れやカップルを見て司は思い出した。一番印象に残つてるのは?って聞かれたら何だろうか。やっぱり、初めて花火を家族でみに行つたのか初めて女の子と2人で出掛けた中学1年のやつだらう。

女の子と言つても誘つたわけでも、誘われたわけでもない。たまたま家族と行つたらあいつも家族と来ていたのだ。あいつは、小学校は違つていた。俺の通つていた中学はほとんどが地元の小学校からの持ち上がりだ。あいつは、中学から引っ越してきて同じ中学のしかも同じクラスになつた。

今、思うとあいつは最初はクラスに馴染んでなかつたのかもしれない。ただ最初は、みんな警戒してか知らないが小学校から仲が良い奴らが固まつっていたからかも知れない。また、俺もその1人だつたかもしねりない。あいつとは、同じクラスつてだけで仲が良いわけでも悪いわけでもなかつた。ただ、互いに顔と名前は知つていた。

母親同士は、最初のPTAで意気投合したらしい。だから、あの時も家族とは別れて

「2人で見に行つてらっしゃい。」なんて言われて当惑する俺を残して置いていつてしまつたのだ。突然、2人にされたつて気まずいだけだつた。

「ほら、せつかくだから見に行こうよ。」

俺は、小学生のこの花火大会が初まつた時からほとんど欠かさず見に来て見飽きていた。初めて見に行きた時の様な感動や新鮮さが失

われていたからかもしれない。花火は、まるで夏に咲くヒマワリの様に見えていた。ヒマワリは、夏に咲くのは当たり前だし、見てもさほど感動はしないだろう。それに、見に行かなかつたのは家族旅行をしていた小3、夏の風邪を引いていた小5の時だけだ。

しかし、俺のそんな意向を無視して、彼女が手を引っ張つて俺を連れていった。おかげで、しばらくは学校では2人が付き合つてゐて噂される羽目になつた事、そして、俺が必死に疑惑を全否定したことも言う必要はないだろう。

「ほら、行くよ。」

今日もあの時と同じ様に歩に引っ張られて花火大会へと向かう事になりそうだ。

あの頃（後書き）

感想などをお待ちしております。

ガタン、ゴトン、ガタン、

いつ乗つても司は、この電車を好きにはなれなかつた。もう古いし、お世辞にも綺麗とは言えない車両だからだ。

唯一の良いと思うのは、ラッシュ時でも東京の電車の様にすし詰めにならない事ぐらいだ。

でも、母親の話だと近々この路線は廃線になつて新しい路線が出来るらしい。（あくまで、母親から聞いた噂だが。）でも、工事やその話があまり耳に入らないのからするとしばらく先の話のようだ。しかし、廃線になると聞くと淋しい氣もするから不思議なものである。ずっと子どもだつた頃から乗つていたせいだろうか。

高校には、よく詩織と健と通つていたつけ。

健つていうのは、杉山健。俺が高校2年の時に事故で亡くなつてしまつた。きっと、健がいなければ今、大学にすら通つてないかもしない。きっと、詩織も通つてないかもしれない。

健は、運動も勉強もよく出来るやつだった。多分、どの小学校に1、2人はいるだろう。そういうやつと思つてくれれば、すぐに想像がつくだろう。

中学の時には、サッカー部で強豪が多い県央大会で3位に入つて県大会までいった。

確かあの中学校のサッカー部が県大会まで勝ち上るのは、母親が中学校にいた時以来の快挙だつたらしい。勉強も学年ではいつも10番以内には入つていた。

「この辺りだよね。健ちゃんが事故にあつたの。」

突然、詩織が話し掛けてきた。

司は、忘れるはずないだろと思いながら黙つて頷いた。

そういうえば、健が事故に遭つた日も今日の様な空だつた。

あれは、忘れもしない8月17日だった。

「何か考え方か？」

彰が心配そうな顔で尋ねてきた。

「いいや。何でもない。」

そう言って、花火が終わったら8月17日前に健の墓参りに1人で行くことにした。

司は、もう考えるのをやめる事にした。

健が過去は悔やんでも変わらないってよく言つてたから。

長い夏の夜

「ついたぞ。歩。」

司は、となりの席で司に寄り掛かかる様にして寝ていた歩を起こした。

司もいつの間にか寝ていた。起きると、この電車も花火大会まで行く人でかなり混雑してきていた。それよりも、歩が横で寄り掛かつて寝ていたことの方がビックリしたのだが。

駅からでて花火大会の会場へと向かつて歩いた。毎年来ているのに、とても懐かしい気がした。

「あつ、かき氷だ。」

いかにもわざとらしい。でも、調子の良い詩織に引っ張られて屋台まで連れていかれる司がいた。

「おじさん、イチゴ2つ。」

詩織が元気よく注文した。

「俺はいらないよ。」

「何言つてんのこいついうのは男が払うつて相場でしょ。」
帰ろうとするのをとめられた。

仕方なく2人分払った。彰も歩の分を払つてゐるらしい。

「どうせなら、歩に買うんだつた。」

独り言の様に言つたつもりなのに、ズズムシの奏でる音にも搔き消されず詩織には聞こえていた。

「やっぱり、司は、歩のこと好きなんでしょう？」
「別に。」

「ごまかそうとしたが、顔には嘘だつてかいてあるのは自分でも分かる。」

「で、こつ出すのへ同くん。」

意地悪そうな笑みを浮かべて詩織が聞いてくる。

「いつかな。」

言葉を濁した。言葉が最後まで司の口からでてくる前に詩織は話し始めている。

「じゃ、あたしが一役買ってあげようか?うん。それがいいかな。」
詩織は、勝手に納得している。

「何が良いの?」

後から追い付いた歩が会話に入ってきた。

「だから、司が、」

「あれだよ、ほら、経済史のレポートについて話してたんだ。」

慌てて詩織が言おうとしてたのを司が遮った。
歩の背後では、彰が詩織と俺のやりとりから察したのだろうか笑っていた。

そんなに焦る事はないだろう。だって、夏の夜は暑くて長いのだから。

「ねえ、2人つきりになつたんだから聞かせてよな。」

「何を?」俺は、わざとらしく聞き返した。

「歩につこの想いに決まつてるでしょ。」

何でよりによつて詩織と2人になつたかといつと、彰が2組に別れようつて提案したからだ。

そこまでは、良かつたのだが彰が俺と歩で組ませよつとする前に、詩織がじやんけんで勝つた方、負けた方で組もうなんて言い出した。それでも、確率は一分の一なのだが。。どうやら、司は運にも見放されたらしこつて事がこれでハッキリした。

「どういう所が好きなん?」

詩織はしつこく聞いてくる。人の事にいちいち口をだしたがるのだ。
「別に好きなんて言つてないでしょ。」

そう答えてみたが

「ほら、夏休み前の経済基礎でノートとらなかつたの歩をぼーっと見てたからでしょ。いつしょに出てたのに目があかしな方ずっとみてたしね。それで、教授に板書消されたんでしょ? 別にいいんだよあたしは歩にこの事言つても。」

「分かつた、わかつた。」

「答えになつてないじゃない。そんな事だと嫌われるよ。」

まったく余計なお世話である。

「あつ、クレープ食べてないね。」

「これも俺の奢りかよ。」

司がぶつさりぼうに叫うと

「正解。」

まったく俺の財布の中は気にしていないらしい。
一人でクレープを食べながら歩いていると、

「優しい所かな。」

「えつ。」

「だからさつきの質問の答えだよ。」

司が叫うと

「おお、素直に認めたね。」

時計を見ると10時を指そぞとしていた。

「10時に駅前に集合だから戻るか。」

俺が提案して駅の方に歩きだした時、いきなり手を引っ張られた。

「ねえ、あたじや付き合つのダメなの？」

一瞬、何を言つてるか分からなかつた。

「あたし、優しくする。司の事好きなんだよ。」

突然でビックリした。

言葉を失うつてこいついう事なんだつて司は思つた。

「ゴメン。急にこんなのが言われても困るよね。でも、歩と付き合つ
ならないかな。でも、あたし、司のこと。」

詩織の頬から涙がつたつていた。

詩織が泣くの見るのは健が亡くなつた時以来だつた。

自分が原因で泣くなんて夢にも思わなかつた。

「もう、何も言わなくていいよ。」

なぜか司は、そつと詩織を抱きよせた。

祭の後の静寂と詩織の髪の香りが、心地良かつた。

詩織がこんな風に想つていたなんて、全然気付いてやれなかつた。

あれから何日が経過しようとした。

司は、ただなんとなく「過ごして」いる気がした。そういうなんとなくつて表現が一番適当だった。未だに、気持ちも整理できていない自分がいた。

ふと、健ならいつこの時どうするんだろうと思つた。あいつなら、なるようになるをなんて笑い飛ばしてくれそうだ。いや、何を賭けても良い。少なくとも俺の知つてる健は、そういうやつだ。

そういえば、健の命日までに墓参りに行く事にしたのを思い出した。

明日に行こうって決めて眠りについた。

朝、起きるとなんだかすつきりした気分だった。

何の夢をみたかなんて覚えてないけれど、とっても心地の良い夢をみたなのは確からしい。

自分なんかが中心に世界は廻っていないのはとっくの前から知っている。けれど、今、この町、いやこの空間だけは、じぶんを中心に動いてる気がした。

ゆっくり仕度をしてから健の眠つている墓に向かった。

家から40分くらいの少し丘みたいになつてこむ共同墓地の片隅にそれはある。

司は、自転車を丘のふもとでとめて、ゆっくりと丘のまづいでいく。やつとのぼり終わるつて時に、人影が丘に飛び込んできた。誰だらう、そんな事を思ひながら近付くと相手は振り返り、司に氣

付いた様な感じだった。しかし、こちらを向いたまま立つてゐるだけだった。近付くと、そこには詩織が立っていた。

木の枝が風で揺れてザワザワと音をたてた。しかし、夏の風が背の背中を押してはくれなかつた。

2人が黙つて立つていた短いはずの時間がとてもなく長く感じた。それは、サッカーで勝つている時のロストライムの様に。

司は、携帯の着メロで起きた。

最初は、田覚ましかと思ったけど、司は田覚ましをかけていないのを思い出した。

またが、携帯の液晶みて思った。

電話は、彰からだつた。

ここ3日は、彰からの電話で起きていた。

大学は、3日前から始まつていた。

「今日も調子悪いの？」

ほんとは、風邪なんて嘘だつた。ただ、何となく詩織と気まずくて会いたくなかった。

いつまでも、逃げてばかりはいられないだろ？

「今日、かなり良くなつたから午後から行くよ。」

「歩も会いたがつてたよ。」

彰は、のんきなものである。

「一言、余計なんだよ。」

そう言って電話を切つた。

この何日か、いや、夏休みの終わりから結論を先延ばしにして、逃げてるだけだつた。考えれば考えるほど、分からなくなる。きっと、詩織も普段と何も変わらなく接してくれるだろ？これが、昨日の夜に出した答えだつた。

カーテンを開けると久しぶりに見た太陽にくじつとした。まだ、夏と同じくらこ暑い。

彰に行くと言つたからには、大学に行かなくてはならないだらう。大学に行く為の、調度良いきっかけが出来たと思えば良いだらう。

そもそも、前期は彰はあれだけサボっていたのに、後期になつて急に大学に行くようになつた。

最初は、眞面目になつたのかと関心して、俺も見習わなくてはと思つた。

しかし、昨日、心配して家に来てくれた歩の話が謎を解きあかしてくれた。

彰は、テニスサークルに好きな人がいて、その子に会う為に大学に行つているらしい。

それを聞いて少しホッとした。

そして、昨日もその子と出かけるから来ないらしい。歩は、詩織をあえて誘わなかつたそうだ。

どうやら、風邪が嘘つて事も分かつてゐるし、詩織の態度から俺と詩織の間で何があるつて感づいたらしい。

女の感は、鋭いものだと部屋に差し込む黄色っぽい様な夕日を見ながらしみじみと同は思った。

「元気そうじやない。」

歩がジユースをすすりながら言った。
「風邪が嘘つて知つてたんでしょう？」

俺は、歩に問い合わせた。

「まあね。だって、詩織が司の所に様子でも見に行ってくれって言わ
ないから、おかしいって思ったのよ。」

「それの何がおかしいの？」

司は、純粋に理由を尋ねた。

「だつて、彼氏が風邪引いてたら、気になるでしょー？それで、上
手くいってないのかなと思ったの。」

少し、オレンジジユースをむせてしまった。

「俺は、詩織と付き合つてないよ。」

「えっ、やうなのー？」
これには、歩が驚いたらしい。

「そうだったの。司、ゴメンね。勘違いしてたみたい。今の忘れて
ね。」

わりかし歩の推測は、当たっていないわけではないが司は、何も言わ
なかつた。

「あのや、」

しばらくの沈黙の後、歩が口を開いた。

「あの、詩織ね。司の事が好きなんだよ。さつき、あたしが言つち
やつたけれどさ。」

その時は、何も答えなかつた。

でも、沸騰したみたいに顔が熱くなるのが分かつた。

夏の暑さのせいでは、ない熱さだ。

「だから、司。今、フリーでしょ。好きな子がいないなら、詩織と
付き合つ」

「歩は、彼氏とか好きな人いるの？」

会話を遮る様にして、俺は歩に聞いていた。自分でもよく分からな
いが、熱い物に触ると手を引っ込めるみたいな反射の様に、無意識
に歩に聞いていた。

「秘密だよん。」

笑いながら、歩は答えた。夕日のせいなのか、歩の顔も赤く見えた。

「じゃ、また明日ね。大学来なさいよ。詩織も心配してゐはずだか
らさ。」「

そう言つて歩は、帰つていつた。

歩は、彼氏がいるのだろうか？

好きな人がいるのだろうか？

でも、詩織と俺を付き合わせたいなら、俺を少なくとも好きではな
いらしい。

それが、昨日の話。

もう、午後になろうとしていた。

相変わらず、太陽は容赦なく俺達と照らしていた。そして、俺達の未来も明るく照らし続けてくれる事だろう。

夏の月

司は、みんなが昼を食べるベンチに行つた。前と同じ様に3人が座っていた。前は、自分もあの中で楽しく話していたはずだつた。周りからは、司が緊張しているのが手にとるよう分かるだらう。

「よつ、司！久しぶり。」

彰が気付いて声をかけてくれた。

「久しぶり。」

歩、詩織とも挨拶を交わした。詩織を見るのは久しぶりだった。

そして、何事もなかつた様に一口が過ぎよつとしていた。講義が終わつた帰り道、歩が

「久しぶりにみんなでドコかに食べに行いつよ。」

歩がみんなを誘うのは、珍しかつた。

「悪い、今日、ちょっと用があるんだ。」

彰が少し気まずく断つた。

「バイトか何か？」

「いや、まあ、いろいろとね。」

彰は、言葉を濁した。

「いいよ、行つてきな。咲ちゃんでしょ、ひ？」

「悪い、また明日ね！」

そう言い残して3人とは、逆方向に向かつた。

「彰の好きな子、咲つてこようだ。」

司が呟いた。

「正確には、美咲だけどね。やせしきれや。彰には、もつたいないんだよ。」

歩が冗談まじりに説明してくれた。

「おー一人さん。あたし、邪魔なら帰らうか？」

歩がちやかしてくれる。

「いいよ。3人で食べに行くんだ。」

歩に話した時の俺の頬は、紅潮していたかもしれない。

「じゃあ、お言葉に甘えます。」

詩織がいきなり言ったので驚いた。

「じゃあね、おー一人さん。」

やつぱり、歩は悪戯っぽくウインクして駅の方に行つてしまつた。

「『メンね、歩どじやなくて。それより、何か、同あたしの事避け

てない？」

「キツとした。避けてはいない。でも、ぎくしゃくしてこると俺も思つ。

「詩織は、謝らなくていいんだよ。ほら、俺が詩織に返事しないから悪いんだよね。」

思つてこむ事を言つたらなんかすきつせりした。

「いいの。コメンね、いきなり告つて。歩が好きなのにね、、、あたしは、謝れてすつきりした。歩に電話して、3人で食べに行こう。」

そう詩織が言つた時に、司の口が勝手に話し出していた。

歩は、他の奴好きみたいだし。気にしないで。あと、返事だけど、俺も詩織が好きだよ。」

「、、いよいよ、いまさら『気をつかわないでさ。』

「俺は、本気だよ。詩織。」

何でこんな事を言つたか分からないうが気付いたら発つしていた。

「付き合つて、もし、別れたら気まずくなつて友達に戻れないつてずつと考えてた。でも、俺は分かつたんだ。別れなければ、いい。それに、好きな気持ちに嘘はつけないんだ。」

「ありがと。」

また、詩織は泣いていた。夏と一一番違うのは、嬉しくて泣いている

事だ。

月に微かに照らされた公園を2人きりで歩いた。

その時、公園の時間は2人を中心廻つてゐようだった。

今日、司はいつもより早く家を出た。

今日という日を楽しみにして、早く起きてしまう事は誰にでもある事だ。良い例は、小学生の時の遠足。いつから、そんな事がなくなつたのか。

その答えたは、同しか知らないのだが、自分でよく分からなかつた。

つまり、同の場合は、今日がその何年ぶりかの日だったのだ。いつも、時間ギリギリに着いく司は、とても新鮮な感じがした。

大学の授業が終わるのが待ち遠しかつた。同は、時間が自分を焦らしている様にしか思えなかつた。

時計の針が17時半を指そうとしていた頃に司は、公園にいた。

「待つたよね？」

「いや、全然。どこに行きたい？」

その声を聞いたのは、司が公園に来てから30分後の事だった。

長く待ち伏せていた司だったが、逆に、詩織に質問してみた。

しばらく悩んだ後に詩織は、ここでいいやつて言ってくれた。

あんまり、司が今月お金がないのを知っていたからかもしれない。司は、ありがたくこの公園を散歩する事にした。

この公園は、大学に割と近くてカップルとかがよく待ち合わせに利用している。

「司は、どこに行きたいの？」

つて、詩織の質問に正直に詩織に合わせるつもりだったから考えてなかつた、て答えた。

詩織は、あたしも同じだよつて笑つてくれた。

司は、二人で話しながら公園を歩くのが、こんなにも楽しいなんて思わなかつた。

くだらない話しあり、していなかつた。詩織とは、いつも普通に話してたのに、こうやって待ち合わせまでしてまで話すのは何か上手く言えないけれど、特別な感じだ。

月に照らされて、初めて詩織とキスをした。

満月が一人を優しく見守つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2463f/>

夏の風

2011年9月28日12時39分発行